洗濯考

イチ

さて、要求をのませるということにもコツはある。相手が自身の息巻く憤怒に身を任せていて、更にその要求が無邪気なオムライスのパセリよろしくちょっとしたものならば、そこらの素人では全く歯が立たないものだ。

まず第一に、相手をさりげなく褒める。あくまでさりげなく、絶対に真意をさとられぬよう気をつけること。この点、ザジは概ね上手くやったと心の中で満足げにうなずいた。目の前の不愉快な男の眉根が寄せられていることといったら眉間が可哀想になるくらいで、褒めるところを探すためにひどく骨を折ったが、とうとうやつが先週買った素敵な空色のハンカチを引っ張り出し、無事「お世辞を言う必要はない、早く要件を話せ」と吐き捨てるような仏頂面のお墨付きをもらった。

次に彼は、少々深刻な顔を演出して、沈黙が二人を包むのを少しの間待った。息を吸って、止め、少し考えるように視線を彷徨わせたあと、ため息として吐き出す。ここで初心者がやりがちなミスは焦って本題に入ってしまうことで、あまりに単刀直入だと相手はよし、聞いてやろうと言う気もなくなる。まだ温めていないお湯をカップ麺に注いでも待ちに待った至福の三分後は永遠にやってこないし、まだ顔の前にニンジンをぶら下げていない馬はどんなになだめすかしても絶対に走らない。それを十分承知しているザジは土曜日の昼間の公園によく見られるショッキングな光景についての深い洞察力をうかがわせる問題提起と、それに関連して氷山の一角という語の持つらせん状の逆説的嚥下感について悠々と語った。さりげなくこちらの高尚な脳みそをちらつかせ、相手に対する優位を確保した上で、何かのついでのように本題を紛れ込ませるのが一番効果的なのだ。

しかし、寝る前のお楽しみとして用意していたパピコをザジに勝手に仲良く半分こさせられたラティジジエリは、聖なるガンジスのように完璧な泥色のシャーベットで頭がいっぱいだった。彼は彼で好き勝手にぶつぶつと文句を言い始め、銘々の自分勝手がヒートアップしていった結果、ついにとっくみあいの喧嘩に発展した。ヤマタノオロチの類いの数あるどの口で食べられたとしても結局行き着くところは同じであり、つまりザジがどうアプローチを展開しても、ラティジジエリとの感情的、肉体的ないさかいはすでに運命づけられていたようなものだった。

「ちくしょう、素直に謝ると誰もが思ったろうさ、なのになんだ、おまえは？謝るどころかぐちゃぐちゃ言いやがって。どうせ、おい、分かってるぞ、厄介をおれに押し付けるつもりなんだろう。そもそも冷凍庫にチューペットがあったのになんでおれのパピコを」

ここでザジの腕が伸びてラティジジエリのかかとや首や万国旗のエプロンやその他たくさんの障害をすり抜け、うまい具合に彼の口

を塞ぎ、二人はしばらく無言でどたばたやった。ザジの口にはとっくにくだんの素敵なハンカチが詰め込まれている。

地の底から響く不気味なささやきのように、洗濯機が陽気にピロピロと電子メロディを奏でてはやくも十分が経った。地球で迷子になった洗濯機型宇宙ロボットがどういうわけか極東の脱衣所に迷い込み、母星に向けてSOSを発信しているのでなければ、その電子音は明らかに洗濯機の唯一の存在理由である洗濯が終わり、服にとって彼の中でごちゃごちゃしていることの価値はこの後下降の一途を辿るということを示していた。つまり今すぐ服のシワを伸ばし竿にかけていかなければ、最終的にこの家から生き物は姿を消し近所の小学生の絶好の肝試しスポットになるだろうという警告である。

その第七のラッパから十分が経った。息を切らして髪をぐしゃぐしゃにしていること以外は、十分前と何も変わらない二人である。いや、プールサイドでタオルにくるまって震える子供の唇のような色のハンカチが湿ってもいた。

「前回はおれがやったぞ」

「前々回と前々々回はおれだ」

「前々々々回と前々々々々回と前々々々々々回はおれだった」

実際のところザジもラティジジエリもこうだったらいいなという願望を相手の発言の上に積み上げているだけであり、問題の根本的解決には一歩も近づいていないことに渋々ながら思い至る。

今二人の前に立ちはだかる壁は、人知を超えた雄大さと感嘆に値する歴史を持ち、ついでに二足歩行を始めた猿の子孫ならばどんな馬鹿でも思いつきそうな解決策を隠し持っていた。ただ、やればいいのだ。洗濯物を掛ければいい。しかし、言うは易く行うは難しとはまさにその通り、何とか大きなコンクリートの壁を乗り越え息をついて目にするのは小鳥がさえずる楽園ではない。深く、広く、暗く、冷たく、深く、深い谷である。闇に紛れてうごめく恐ろしい怪物が闊歩する谷が黒々とそして静かにその口を開けて待ち構えているのだ。

いったい誰がこの谷を越えようと無謀な挑戦を企てるだろう？切り立った崖には草木一本も生えず、船越英一郎がかろうじて片手でぶら下がっているのが見える。時間は刻一刻と過ぎていく。この絶望的な状況の中、二人は闇を覗き込み黙って互いを小突きあうことしかできなかった。

「お互い冷静になろう。ガキっぽくがなるのはやめて冷静になれ、エリ」

「ザジ、それはこっちの台詞なんだ。言われなくともおれは最初から冷静だった」

「そうか」

「そうだ」

「……ほんとか？」

再び沈黙。どうしても虚空に足を踏み出す勇気が出ない。

「ザジがやればいい。礼拝堂での失態を挽回するべきだと思わない

か？おれは喜んで譲ってやるぜ」
「なんだと！？ああ、確かにおれはウェンディムーアのばあさんにひどく叱られたよ。ばあさんは驚いてどぶ池に落っこちちまったんだから、当然だよな。だけどばあさんを驚かせたのはちっちゃくてイキの良い茶色のバッタどもで、そのバッタってのは、エリ、おまえが勝手におれの礼拝用靴下に詰め込んだんだろ。おまけにガキみたいにおれをくすぐって、だから靴下からバッタが逃げた！おい、信じられるか？結局貧乏くじを引いてばあさんと人生について討論するはめになったのは、ただおれ一人だった……あの時おまえは家にさっさと帰りやがって冷たいピザに文句を言ってた！
こんなことは言いたくないがな、ああ、今思い出してもむかっぱらが立つぜ。トッピングにハムはともかく、パイナップルを選ぶとは頭がおかしいとしか言いようがないよ。おまえを心底軽蔑するね。おれの前でピザに指一本でも触れてみろ、てめえのケツから鼻までペパロニを詰め込んでやる」
言うまでもないことだが、二人の間にまた同じような緊張が走った。時間が巻き戻ったような展開は飽き飽きした作者に省略され、そして、再び落ち着きを取り戻したころ、水と油の二つの心に同じ色が染み出した。ほとほとうんざりしていた。
こういう時彼らはどうしたらいいのか？醜い争いを記憶の続く限り繰り広げ、至極短い、しかし永遠にも感じられる不可解な人生をくそったれな悪意と手を繋いで生きていく。腐れ縁の優越感と似た者同士の怠惰が両脇に控えているうちは、同じく同族嫌悪にがんじがらめの他人に触れるだけで虫唾が走る激痛に身悶えする。部屋のドアにつっかえて後にも引けないダブルベッドのマットレスのように、本懐を遂げることなく切り刻まれ大型ごみにもなれず燃やされるだけなのか。ところで、彼らはこういう時どうしたらいいのか知っていた。
ザジは無造作に拳を突き出した。疲れきって差し出された拳はもはや、昼寝から薄く覚醒した犬の鼻先のように柔らかで無関心だ。ラティジジエリは視線を自身の左手の指の股に据えたまま、ザジに応じて軽く握った拳を少し持ち上げた。彼らの主要武器であった握りこぶしはいまや疲弊して、投げやりな気持ちで最後のリングの思い思いの隅に突っ立っている。観客も、セコンドも、レフェリーもいない。土曜の昼下がりは選挙期間以外は大抵静かなものだ。二人は呼吸を合わせて腕を上下に軽く揺らす。
「最初はグー…じゃんけん……！」
ついにプラスチック製の地獄の蓋が開けられた。中を恐る恐る覗き込むのはザジだ。彼はしばらくあいこで耐えていたが、四回めでこらえきれずチョキを出してしまい希望とともに刃はボロボロに砕けてしまった。
そもそも、じゃんけんというのは子供の遊びを超え、人間の文化の一端を超え、神の域に達する唯一の偉業だ。猛禽類がその鉤爪の牢

屋に短期滞在の囚人を加えようと音もなく急降下するように、土曜日の次の日は日曜日のように、三カ月も使ったメモ帳は端がたごまってもう使いたくない気持ちになるように、人間はじゃんけんをし続ける。万物の運命が一寸の狂いもなくバターを切るように三等分され、人間のかけ声それだけで数学的美しさをたたえた運命の終着点は何者をもりょうがする。森羅万象を従える完全無比の宇宙の法則にまた一つ頬の赤い喜びに満ちた一節が付け加えられる――ザジはラティジジエリに負けた、という事実が。価値観の相違や科学者たちの理を等しく飲み込む大きな波は、清々しい朝日に照らされ光り輝くのだ。そして矮小で不定形な人間もつかの間の、しかし確約された絶対を手にすることとなる。

とにかく、そうしてザジはなんとか洗濯物を干し、飽くなき糖分への欲望に取り憑かれたラティジジエリは今度は雪見だいふくを買いに出かけていった。じゃんけんに恨みは無いがラティジジエリには恨みがあるザジが雪見だいふくの片割れを狙っているのはいうまでも無い。